

お茶の水地理学会見学会 '94

—千葉県立青葉の森公園—

森 本 泉

葉桜の新緑が麗らかな日差しに眩く映え、恰も初夏を思わせる陽気の中、千葉の県立青葉の森公園にて、見学会が催された。案内して下さったのは、栗原尚子先生、助手の葉倩璋さん、そして当博物館で学芸員をなさっている29回生の八木令子さん。及び、13名の参加者が千葉の県立中央博物館前に午前10時半に集合した。

当公園は、かつて畜産試験場だった跡地を利用して造成され、昭和62年に都市公園として設置された。およそ54ヘクタールの敷地内には中央博物館を始め、生態園、芸術文化ホールといった文化ゾーンに加え、スポーツゾーン、自然ゾーン、リクリエーションゾーンの四区域が設定され、各施設が配置されている。

午前中は、博物館の説明を受けて後、館内の展示を説明を聞きながら案内していただく。千葉の古い農家の家の造りを再現した模型、町境におかれていたという石碑やしめ縄の類等、民俗的な展示が数多くある。又、下総台地の八街町（平成3年より市政がひかれる）の昭和半ばの畑の利用状況を再現したジオラマもあった。それを見ると、落花生の特産地であったことが一目瞭然に分かる。八街は、明治時代以降に武州（現在の埼玉県）農民が入植して切拓いた畑作地帯であり、現在でも銚子に継ぐ園芸作物の生産高を誇る畑作地帯である。そのジオラマは、火山灰土壌であるため舞い上がる砂塵を防止する目的で植えられた茶垣、開墾以前馬牧場であったことを示す野馬上手等、細部に至るまで手が行き届いていた。数年前に八街でフィールドワークをしたことのある筆者にとっても、驚くばかりの精巧さであった。畑作地に対して、栄町の利根川による洪水防止を目的とした、輪中の形態をとった水田集落のジオラマも展示されていた。

博物館の周囲は現在も造成中であるが、芝生に覆われた広々とした公園の木陰で戴いたお弁当の味は格別。土曜日だということもあり、小さな子供を連れて、お昼を食べに来ている家族や若者がちらほら。公園自体が広いこともあって人影がま

ばらで、思いきり解放感に浸れる穴場を見つけたと、皆さん、お喜びのご様子。公園内を少し歩いた。西洋庭園を模した庭の中央には四角い池があり、噴水の涼しげな音が耳に心地よい。更に先へ足を進めていくと、住宅の造成現場や、雑然とした千葉の町並みが目に飛び込む。一瞬のうちに現実に戻されてしまったが、その先には彫刻の広場もあり、様々な彫刻が飾られていた。

午後からは生態園へ。こちらは中央博物館の本館に隣接した野外観察地で、房総半島の様々な森林や草地在り再現されつつある。南総の海岸植生や北総のマダケ林まで造られており、植物を鑑賞しながら散歩できる小道がある。整備された庭と違って、すくっと伸びた蕨が目についたり、変わった植物を見つけたりと、そんな楽しい偶然も期待できる。

生態園の散歩を以て今回の見学会は早めにお開きになったが、見残した博物館の展示を思い思いに楽しんだ。その中で筆者が特に印象的だった展示は鯨の標本である。捕獲された鯨を当地まで運んできて、一年間土中に埋めた後、掘り出して組み立てたという鯨の骨格の標本である。その大きさばかりでなく、鼻にツンとくる刺激的な、生々しい臭いに圧倒された。

私事を述べさせていただくと、当公園の裏手に母校があるのだが、確か高校一年生の終わり頃、マラソンコースとして走り回っていた当地が立ち入り禁止地域となった。そこで何が起きているのか考えもしなかったものだから、自分の脳裏にある荒地がこんな立派な公園の一角になってしまったことを知って、些か驚いてしまった。

遠路遙々いらした方も少なくなかったが、展示内容は勿論、広い空間に青々と敷き詰められた芝生、そして何より春麗らかな陽気に恵まれ、道中の疲れが癒されたことと思う。今回、見学会に参加されなかった方も、是非一度訪れてみてはいかがであろう。

（1994年4月16日 案内者：栗原（16回生）・八木（29回生）・葉（34回生）会員）